

ルノアール パリに恋した12人の画家たち

横浜美術館

2019. 09. 21～2020. 01. 13

「オランジュリー美術館」は、19世紀後半～20世紀初頭のフランス美術を収蔵・公開するフランスの国立美術館で、印象派とエコール・ド・パリの珠玉コレクション、モネの「睡蓮」連作、斬新な企画展の三つの魅力を楽しめる。

本展は、ルノアールの名作《ピアノを弾く少女たち》をはじめ、セザンヌ、マティス、ピカソ、ルソー、モディリアーニらの名作品「約70点」の絵画が一同に集結して展示されるため話題を呼んでいる。

ルノアール 《ピアノを弾く少女たち》

1892年頃 油彩/カンヴァス



晩年の作品で、同テーマの絵画が他に数点あるが、柔らかな色調に暖かな雰囲気が漂って最も完成度が高く構図も緊密で豊潤で豊かな暖色を用いて豪華に描かれて、画面に見入る表情からピアノの音が聞こえてくるようである。

二人の少女の愛らしい表情や頭髪、衣服の動き、柔らかい肌の質感などの描写は、まさに「愛でる、安らぎ、ぬくもり、家庭的」の雰囲気を醸している。

マティス 《赤いキュロットのオダリスク》 1924年頃油彩/カンヴァス



画伯の初期ニース時代の作風は、エキゾティスムの流行の中で、豊かな模様でアトリエの一角を囲って一種の舞台を作っていて、オリент風の調度と衣装をまとわせたモデルをポーズさせた「オダリスク」がしばしば描かれている。

ユトリロ 《サン・ピエール教会》

1914年 油彩/薄紙



主題としてモンマルトルの教会が頻りに描かれているが、本作品は特徴的な白色を厚く塗り重ねて、筆使いで空は深みを減らしている。構図は、門後ろが教会の正面でサクレ・クール寺院の鐘楼と二つのドームで、舗道や道路は凸凹のある表面を伝えるために、明るい色調と暗い色調が交互に繰り返される繊細な筆使いで描かれている。この異なる筆致の使い分けで絵具の豊かな表情でパリの街に漂う哀愁を伝えてくれる作品である。